

坂口安吾研究

森安理文 高野良知 編



南 窓 社

(坂口安吾研究)

昭和四八年六月二五日印刷	昭和四八年六月三〇日発行	定価 参千貳百円	編者 森安理文 高野良知	発行者 岸村 正路	印刷者 松沢 友春	発行所 東京都千代田区西神田二丁目四番六号 株式会社 南窓社
--------------	--------------	----------	-----------------	-----------	-----------	-----------------------------------

(電話) 03-261-7617・(振替) 東京 96362
0098-801432-5628

目次

作家論

無頼文学と坂口安吾

長谷川 泉 3

ファルス論について

三枝 康 高 25

牧野信一と坂口安吾——その邂逅の経過をめぐって——

薬師寺 章明 51

評論と小説との間——無形の説話体について——

馬 渡 憲三郎 77

坂口安吾論——「巷談」的発想について——

高 野 良 知 107

坂口安吾論——「八方破れ」の正当な位置づけについて——

森 安 理 文 129

坂口安吾論——無頼昇天——（転載）

磯 田 光 一 159

作品論

「風博士」

清水 葉子 177

「黒谷村」

荒川 法勝 189

「小さな部屋」をめぐって

庄 司 肇 205

「おみな」

佐野 和子 219

「吹雪物語」

有山 大五 227

「紫大納言」論とその宿命的位罫——ファルス・あるいは坂口安吾の詩と真実——

松本 鶴雄 243

「木々の精、谷の精」——坂口安吾のイデイル——

小川 和佑 259

「勉強記」——風俗化されない魂について——

土屋 慶子 273

「文学のふるさと」

竹内 清己 281

「日本文化私観」と「墮落論」の間

高橋 春雄 297

「白痴」

「風と光と二十の私と」

「私は海をだきしめていたい」——肉体の精神化——

「大阪の反逆」——織田作之助の死——

「教祖の文学」

「桜の森の満開の下」の鬼

「青鬼の禪を洗う女」

推理小説について

「信長」と「梟雄」

吉田 勉	川崎 浩 繁	伴 悦	松田 悠 美	吉田 熙 生	桂 英 澄	矢島 道 弘	石田 一 男	森 磐 根
425	413	399	381	367	353	337	327	313

文献解題

「クラクラ日記」(坂口三千代)

「坂口安吾」(庄司肇)

「小説坂口安吾」(檀一雄)

「坂口安吾桐生日記」(浅田晃彦)

「坂口安吾文がたみ 叛逆と愛情」(小野竜太郎)

「坂口安吾」(奥野健男)

「偉大なる落伍者 坂口安吾」(森安理文)

「坂口安吾論」(兵藤正之助)

年譜・参考文献

あとがき

石 附 陽 子	437
大 森 盛 和	438
高 野 良 知	440
有 山 大 五	442
竹 内 清 己	444
安 田 義 明	446
増 田 幸 太 郎	448
高 野 良 知	450
森 泉 野 良 知	453

作家論

無頼文学と坂口安吾

長谷川 泉

3 無頼文学と坂口安吾

「無頼文学の系譜」(森安理文編『無頼文学研究』昭和47・10、三弥井書店)を書いたとき、私は「反逆」と「脱出」の二契機をあげ、その二つの契機が創造につながることを述べた。そして無頼文学なるものの内面構造を分析する場合の思考の拠りどころとしては、八契機に注目した。このことは、現在でも変わっていないので、坂口安吾について考察する場合の方法論としても通用するという意味において、そのことをまず先に述べる。「無頼文学の担い手が、反逆と脱出を企てる既成のもの、人間と人間的つながりにおいては(一)自己、(二)社会(家庭や交友関係のような小社会から国家のような大社会)、(三)特殊社会としての文壇、以上の三契機をあげることができる。さらに、無頼文学が、反逆と脱出を企てる既成のもの、文学そのものに執しては、(四)素材、(五)主題、(六)思想・理念、(七)形象化と表現様式、(八)文体、以上の五契機をあげることができる。すなわち、作家と作品とが密着不可分であることを前提として、無頼文学の担い手と、無頼文学そのものを連ねて無頼文学を考察するには、以上の、合計八つの契機に分析することがよいと思う。」これは、考えうる諸契機を同次元に並べてみたのであ

る。いわゆる無頼文学と称されるものが、以上の八契機のすべてについて、それを充足させることは、おそらくないであろう。充足の厳密さを求めることは実情に合わない。そして、上述の諸契機は、同次元に並べたものであるだけに、実際の作品においては、同次元性に反逆することがある。したがって、上述の八契機は、数の上の充足率をもって、無頼文学の本質を論ずることにならない。

以上のような前提に立つて、坂口安吾を考察してみようと思う。それによって、坂口安吾が無頼派に属することの意義が浮かびあがってくれば幸いである。ここでいう無頼派は、無頼文学の系譜のなかで、特定の文学史的意義を担うものの謂である。無頼文学の系譜は、日本の近代だけでも遠く成島柳北あたりまで遡ることができる。近代の境域を越えて、さらに遡上することもできる。しかし、無頼派といわれるものは、ふつう坂口安吾を含めて石川淳、太宰治、織田作之助に絞って考えられている。伊藤整をこれに加えることがある。無頼派が、無頼文学の一つの核であることは否定できないが、それはかなり文学史上の限時の意味を含ませて考えられているものである。

*

人間にとって、人間形成期の体験というものは骨がらみとなって終生残る。人間ができあがってしまったからの、人生観を変えるような深刻な契機というものがないではないが、それはごくまれなことである。川端康成の人間形成期における肉親の死屍累々、孤児の体験が、いかに川端康成の人間そのものに癒着し、川端文学を規定したかを想起すればよい。坂口安吾にとっての人間形成期の体験で無視することのできないのは、学校と学業の落伍者であったことである。

坂口安吾の生まれたのは明治三十九年（一九〇六）である。明治三十九年といえば、日露戦争が終わった後の、

戦勝によっても国力を使い果たした後の疲弊がまだ完全に回復しない頃である。一応の戦勝によって、かつて国力の増強を、国民が思い知らされた時である。教育は大切であった。教育が大切であるということは学校教育も、庭訓も、重要視されたということである。形式的な教育重視の裡にあっては、学業のよくできる子が重んぜられ、幼い心に将来の期待が、ある意味では重い負担となつてのしかかるということである。明治三十九年という年は、島崎藤村の「破戒」が出て、自然主義の基礎を文壇に作つた年である。人生の従軍記者の決意で、藤村は家族の犠牲の上に「破戒」を世に出した。そして、文壇は新しい文学の動向をめぐって転換のきざしを大きく見せたのである。旧来のものに、とつてかわるものが生み出されようとした氣運がみなぎつたのである。

坂口安吾は新潟県新潟市西大畑町に生を享けた。十三人兄妹の十二番目という出生は、末っ子ほど可愛がられる、一種の精神的過保護への甘えの心象を否定することはできない。父は漢詩をよくし、県下第一級の政治家であり、母は大地主の娘であつた。当時にあつては権門と教養は並存した。父母や坂口家の家庭の平均教養をもつてすれば、安吾は秀才でないにしても、すくなくもよい生徒、できる生徒でなければならなかつたはずである。しかし、幼稚園に入學させられた安吾は、ほとんど登園することなく幼くして街を悲しみに彷徨するかのような存在であつた。小学校に入學しても、喧嘩ずきの餓鬼大将であつた。立川文庫につかれて忍術を研究する子供であつた。中学に入學しても、ほとんど学校へは行かなかつた。当然、落第生であつた。放校になつた。体面を保つための上京、転校先でも学業は劣等であつた。中学は卒業したが、学業の嫌いな奴が大学に入學してもしかたがなかるうというので、学校は中学でよして、小学校の代用教員となつた。すなわち、この履歴から察せられるように、学校と学業の落伍者であつた。子供の価値観と、大人の価値観とは相違する。しかし、明治の末年から

大正期にかけての、安吾の中学生生活までは、世のなかの価値観は、大人の価値観をもって律せられていた。子供の価値観を納れる余地は寸毫もなかった。すなわち、安吾の人間形成の過程においては、教育にかけ、学校に行く子、学業のできる子にかける大人の価値観に、全く反逆した生きかたをしたのである。

安吾の最終学歴は東洋大学の印度哲学科である。大正十二年に父が死去した頃から、漠然と求道の念がきざしていたことの、人生への実践的適応である。学校と学業の落伍者であった安吾が、偉大な落伍者たることに徹しようとした居直りは、東洋大学時代の主体的な勉強によって克服された。他律的な力によって心が強制されることに抵抗した安吾は内面の声によって動くことを知ったのである。自我の覚醒が研学と結合したところに意味がある。睡眠時間を四時間に節制することによって神経衰弱になるほど、安吾の勉強は続けられたのである。これは、覚醒された自我が、真剣に自己の心の奥底を諦視する心境である。この求道の凝縮した心によって、安吾は、これまでの自己汚辱感と、学校という小社会への反逆からようやく脱皮することを得た。

社会的に見れば、のちに父の死後の財産整理で坂口家には借財が残ったが、幼少年時代には恵まれた階層にあった。そのことだけでも過保護の条件はあった。しかし安吾は自由放任の父を、スケールの小さい、律義者とし、また悲しみを本質的に知らない冷淡な親として見た。政治家でひまのない父に対して、母の愛情に対する欲求不満はついつて行き、マイナスの渴望が母への憎悪にもつながった。個我に埋没しての乱読の結果は極度の近視眼となつて、学校での学業をさまたげた。「石の思い」に書かれている眼鏡哀話は切ないまでの傷ついた心を物語る。「中学へはいったときは眼鏡なしでは最前列へでも黒板の字が見えない」という状態は、少年の心をいたく傷つけた。一度買ってもらった眼鏡も、落として割ったのちには母にも話せなかったし、したがって英語も数学もわからないことの暴露を恐れる心が学校を敬遠させたのである。意地っぱりで見栄坊の反抗心は、わざと

白紙の答案を出すことにもつながつた。「アマノジャクとは何か。ヒネクレているということの外に、アマツタレているという意味があると私は思う」と「二十七歳」にするす安吾の回想の内面構造は、反逆の姿勢が理由を他に求める自己保全の甘さにつながる微細心理をみずからえぐり出して見せているのである。

「私のふるさとの家は空と、海と、砂と、松林であった。そして吹く風であり、風の音であった」としるし「そして人間というものは誰でも海とか空とか砂漠とか高原とか、そういう涯のない虚しさを愛すのだろうと考えていた」という「石の思い」の記述は、いかに人の心を凝然たらしめることか。これは世捨人の言である。老境に入った、悟道の人の言であるならば、この重量は、人生の年輪に支えられて人の胸に音叉の共鳴の響きをもたらすであろう。「空」も「海」も「砂」も「松林」も「風」も、魂のない「虚しさ」で受けとめられるとき、その人の心は嫌人の空洞になっているであろう。冷くひえて、枯れた、うつろな心がそこにある。安吾の心は、反人間的な設定を自己とその周辺にかこうことをなした。自己汚辱は、そこに生じた。器物としての眼鏡喪失は、みずから視界を閉鎖する自閉・自虐となって、安吾自身に復讐した。そのことを、安吾は声を大にしてうったえることもできなかった。視界を閉ざされた見えない目に、心眼の纖弱だけが神経のいらだちとなってはねかえってきた。以上が、第一の契機としての安吾の自己に対する反逆である。

そして、安吾が反逆した社会は、以上の展望であきらかなように、まず家庭という小社会であり、また学校という小社会であった。第二の契機の考察を、そこに見ることがができる。家庭の構成メンバーは父母であり、きょうだいたちであったが、安吾の反逆の対象は、主として父母であり、とくに母であった。「かりそめにも母を愛した覚えが、生れてこのかた一度だってありはしない。ひとえに憎み通してきたのだ『あの女』を、母は『あの女』でしかなかった」という「おみな」の言は痛烈である。心理の機微でいえば、欲求不満の裏がえしの憤怒

である。そして、そのことは、母の愛した、安吾のきょうだいへの憎しみにもつながってゆく。かくして家は、坂口家は、スキンスリップのない、陰鬱そのものの小社会となる。「石の思い」に描かれた「家」の姿は、安吾に次のような心の腐蝕を強いるものとして映ずるよりほかはない。「私は『家』というものが子供の時から怖しかった。それは雪国の旧家というものが特別陰鬱な建築で、どの部屋も薄暗く、部屋と部屋の区劃が不明確で、迷園の如く陰気でだだっ広く、冷めたさと空虚と未来への絶望と呪咀の如きものが漂っているように感じられる。住む人間は代々の家の虫で、その家で冠婚葬祭を完了し、死んでなお霊氣と化してその家に在るのかのように形式づけられて、その家づきの虫の形に次第に育って行くのであった」と。これは、人を納める家とくに旧家というものに託しての、そこに住む人の集団の象徴としての家をとらえている。実は、家の外形と内観、そしてそこにかもし出される雰囲気、寒々とした感情移入をしているのである。家への反逆と呪咀は、ここに極まっている。「家づきの虫」たることに反逆し、そこから脱出しようとする姿勢を見ることができる。

日本における小社会は、そのよさも短所も、家にもっとも集約的にあらわれる。学校という小社会の、比較的時間の裡から離反し、脱出してみても、家の重圧から離反し、脱出することは必ずしも容易ではない。家には祖霊が宿り、宿命があり、歴史のよんだ空氣があり、それらは、生活の場の溜息として、安吾の身の上のしにかかったからである。そして、家からの脱出は、両親からも、故郷からも脱出することを意味する。安吾は、それをあえてしたのである。

小社会から大社会へせりあがった場合に、安吾の対社会観は、どのような軌跡をとるか。個人と家と学校と故郷への対処意識は、自伝的な「石の思い」「砂丘の幻」によく示されている。そして、もっとも大社会にせりあがった日本という大社会に対する対処意識は「日本文化私観」のなかに示されている。学校という小社会には黒

板があり、家という小社会には「部屋」があり「家の虫」が住んでいた。日本という大社会は「文化」としてとらえられている。日本という大社会をとらえるのに、「日本文化」以外のとらえかたがあるであろうか。

「茶室は簡素を以て本領とする。然しながら、無きに如かざる精神の所産ではないのである。無きに如かざるの精神にとつては、特に払われた一切の注意が、不潔であり饒舌である。床の間が如何に自然の素朴さを装うにしても、そのために支払われた注意が、すでに無きに如かざるの物である。／無きに如かざるの精神にとつては、簡素なる茶室も日光の東照宮も、共に同一の『有』の所産であり、詮ずれば同じ穴の貉なのである。この精神から眺むれば、桂離宮が単純、高尚であり、東照宮が俗悪だという区別はない。どちらも共に饒舌であり、『精神の貴族』の永遠の観賞には堪えられぬ普請なのである。——これは日本と日本の文化の心に沈着している「無」、無きに如かざる精神の具現に焦点を当てての論及である。茶室も、桂離宮も、日本と日本文化の象徴として評価される。安吾は、それを、「無きに如かざる精神」の絶対との対比において、「不潔」「饒舌」として斥けたのである。桂離宮と日光東照宮の、日本美の価値観は一応常識的なものであるが、安吾は、そのような擬視を、巨視の眼光で斥け去ったのである。以上は具象なものに端的に示された一例である。大社会としての日本と日本的なるものは、やはり安吾の精神構造においては、脱出の対象であった。以上は、第二の契機についての考察であった。

特殊社会としての文壇に対して、安吾はどのように処したか。安吾が小説家志望の決意を固めたのは、おそらく昭和三年、東洋大学在学時であろう。この年には安吾はアテネ・フランセに学び、級友には菱山修三、長嶋幸がいた。長嶋は昭和九年に夭折したが、安吾はその死に衝撃を受けて「長嶋の死に就て」を書いた仲であった。アテネ・フランセ時代の友人は、昭和五年、同人雑誌「言葉」での結びつきを形成する。安吾は葛巻義敏とともに

に、その中心であり、長嶋もまた同人であった。文壇という既成の鞏固な一種のギルドにいどむためには、独力では無理である。同人雑誌は、切磋琢磨の場であるとともに、独力では文壇に認められがたいがための作品の集団展示の様相を示すものである。文壇からの声がかからなくても、自分の書きたいものを書きたいように書いて発表することのできる自由で恣意的な場である。「言葉」は二号で廃刊にはなったが、安吾の処女作「木枯の酒倉から」は「言葉」二号に載ったものであった。そして「言葉」の後身が岩波書店から出された「青い馬」であった。「青い馬」は五号で廃刊となったが安吾は「ふるさとに寄する讃歌」(二号)「風博士」(二号)「黒谷村」(三号)「FARCE に就て」(五号)などを発表した。「風博士」が牧野信一によって、「黒谷村」が島崎藤村・宇野浩二によって認められ推されたことは、安吾にとって、いわゆる文壇とのつき合いを形づくる上で大きな意味を持った。島崎・宇野はいわゆる文壇の強者であり、牧野は文壇の泳ぎ手ではなかったが、牧野との交友が安吾に与えたものは「文科」とのつながりでも大きな寄与をなした。「文科」には牧野のほかに坪田譲治、田畑修一郎、小林秀雄、嘉村礒多、井伏鱒二、河上徹太郎、中島健蔵、佐藤正彰、中山省三郎らが拠っており、飲み屋での文学論が閉鎖的な文学のわくを破っていたからである。

大岡昇平をたずねて京都で知った加藤英倫は、安吾の生涯に決定的意味を持った矢田津世子の紹介者として大きな存在となる。安吾の同人歴では「桜」(田村泰次郎、矢田津世子、菱山修三、真杉静枝ら)「現代文学」(平野謙、山室静、檀一雄、野口富士男、杉山英樹、赤木俊(荒正人)、南川潤、高木卓、宮内寒弥ら)が重要である。戦後にも「ろまねすく」(辰野隆、伊藤整、太宰治、林房雄、田村泰次郎、清水崑、寒川光太郎ら)がある。「歴史文学会」を結成して、中山義秀、井上友一郎らと幹事になったこともある。戦後は復興したジャーナリズムと文壇との癒着によって、安吾はもはや同人雑誌を必要としない位置を確保していた。復刊した文芸雑誌は、戦時中に作品を書きためてい